



「まりまり」は、劇場から出て、あらゆる場所にお芝居と、お芝居を使ってコミュニケーションの場を創る企画を、「出前興行」しています。

#### ■初めて劇場の外に出た日

それは5年前、ひよんな事で参加した千歳烏山の「路上演劇祭」での事でした。駅前広場で古典演劇のセリフを喋る私たちの横を選挙カーが通り過ぎ、看板が風で倒れ、「オウムは出て行けー！」と住民運動のシュプレヒコールが始まり、酔っぱらいがセリフを横からくり返す。そんな中、高校生連が自転車のまま芝居を眺め、子どもの手を引くお母さんが観る。私はショックを受けました。「咳払いも遠慮する様な観客に守られた空間で私は今まで演技していたのだ・・・」思えば、舞台から見た客席はいつも同じ様な層の方たちで埋まっていました。

路上を眺めながら私は思いました。「これが本物の世界だ。演劇で世界を変えようと思っていたけど、俳優の私は今まで隔離された小さな劇場の中にいたんだ」と。

#### ■皆がお芝居を求めている

それ以来「まりまり」は劇場に来ない・来られない方々に観ていただく為に、福祉施設・病院・企業などにお芝居の出前をしてきました。当然、観客は普段お芝居を全く観ない方が殆どです。でもそんな方々がお芝居を観る時の目の輝き、物語に引き込まれていく姿、会場で高まる一体感は、演じているこちらも驚くほどの物でした。考えれば「演劇的なもの」は、昔は身近にあり、人の社会生活、精神生活、地域の交流を助ける働きをしていたのではないのでしょうか。季節の行事、祭り、お祝いなど…それは「演劇の効果」を利用したもので、世代間の交流を深め、地域の人々が一緒に笑い、泣き、祈る場を作り、日常の役割から解放される場を作ってきました。

最近の心痛むニュースを見る度、人が、社会や他人と関わり、交流し、一緒に体験する場が欠乏していると感じます。「演劇の効果」は現在の社会でこそ求められていると、出前をしながら実感する様になりました。

#### ■お芝居を使って交流の場を創る

そして次第に依頼主の求めで、コミュニケーションの場を創るお芝居企画を立案して届ける様になりました。障がい者とお芝居を作り近所の方々に見て貰う。高齢者と一緒に演じて児童館の子ども達に見せる。介護職の魅力を伝えるお芝居を介護職者と共演で就職面接会場で上演。企業の新入社員120人に出し物を創って貰い介護施設を慰問する社員研修の立案・運営サポート…などなど。気づくとこれらは全て、普段なら出会わない立場の違う人たちを会わせ、理解や共感を生むお芝居のチカラを利用した企画です。最後には観客全員がお芝居に参加し会場が一体となって物語を楽しみます。今日出会ったばかりの人どうしが目を合わせ声を上げて笑う場がそこに出来上がります。

#### ■ウクライナでの再確認とこれから

この様な興行を09年は英国ほか海外で23、国内で41行いました。普段は出前料で収入を得る「興行」が活動の中心ですが、貴委員会よりウクライナ国際演劇祭への渡航費の一部を支援いただき、招待に応える事が出来ました。

演劇祭での「公演」は好評で、ロシア等演劇祭への招待もいくつか受け、貴重な機会となりました。そしてもう一つの成果は、演劇祭のあと2日後にJICAの支援で地元キエフの一般の方むけに「まりまり興行」が出来た事です。

実は演劇祭の間、キエフの街を歩いて劇場に通いましたが、私に向けられる視線が鋭いと感じる事が多くありました。「一目で外国人と判る君達は厳しい経済状況の中で歓迎されない場合が多い、用心する様に」といわれました。

実際街でも、こちらが挨拶や笑みを投げても返してくれる事はまれでした。劇場関係者が集まる国際演劇祭の盛り上がりと裏腹に私は少しキエフの街に落胆していました。

そんな中で行った「まりまり興行」には街で見かけるようなキエフの普通の人々が大勢来場し、会場の集会室に入りきらない状況になりました。椅子も足らず、窓枠や演技スペースの真横にもお客さんが膝を抱えて座りました。

そして、お芝居が始まると、どうでしょうキエフっ子たちの笑顔のなんて素敵な事！輝く様な笑顔を見て俳優も笑い、相乗効果で会場中に光が満ちる様な時でした。

最後は参加型のお芝居で、日本人もウクライナ人も全員が前からの顔見知りのように一緒になって楽しみました。終演後多くの観客が晴れやかな笑顔で次々に話しかけてきました。「次はいつくるんだ」「家に泊まりに来い」「ウチの学校にも来て欲しい」などなど。その人垣の向こうで、出口へ向かう他の観客も、目が合うと必ず、暖かい笑顔を投げかけてくれました。

私は一人の青年に「みんな日本が嫌いじゃないの？街の人が恐かったけど・・・」と思い切って訊ねました。「日本への関心は高いよ、でも日本人がどんな人かは今日まで知らなかった」「旧ソ連の風習が残ってて、道で笑うと馬鹿だと思われるから笑わないだけじゃないかな？」その答えを聞いて、最後の胸のつかえが取れた気がしました。そして、永遠に出会えなかったかもしれないウクライナと私を「お芝居」が出会わせてくれた事を実感しました。

初めは些細なコミュニケーション不足が、こんな風に他者への恐れや誤解、精神的疲労、人の孤立化を生み、それが放置された結果、社会で人が人らしくいられる場所や、子どもを育む場の欠乏を生んでいる気がします。これを解決できれば、この日のように世界はもっと明るく輝いて見えてくるはずです。

今求められるのは、モニターごしでなく、人と人が実際に会い、ふれあい、感情を共有する「場」を作る「仕掛け」だと思います。その一つとして「お芝居」が役に立つ、という事を伝えたい。そしてお芝居がもう一度社会の中でいきいきと活躍する身近な道具となる事を祈って、これからも出前をしていきたいと考えています。